

1985年12月、日本DNAデータバンク（DDBJ）に助教授として着任した宮沢三造は多くの困難に直面していた。

さしあたって所内で借りられる計算機は、集団遺伝学グループが持つ中型機「FACOM M-150F」だった。当時の日本では主流の「メインフレーム」と呼ばれる計算機だ。機密保持性の高い構造であり、銀行や大企業のシステムに適している。個々のユーザーがシステム全体を管理することはできない。

最新計算機導入に腐心

一方、データバンク構築で先行する米国では70年代からUNIXが急速に普及していた。オープン系と呼ばれるシステムで、ユーザーが自ら管理することによ

って自然に知識が身につく。「米国では研究者全体の技術レベルが高かった」と宮沢は振り返る。先行する米国とのデータ交換を円滑にするためにも、宮沢は

オープン系計算機の導入に向けて仕様策定を進めた。

しかし所内で主に計算機を使う集団遺伝学グループにとつては、メインフレームでも不自由はなかった。

さらに、国産のメインフレームには保守人員もセット

1987年に完成した計算機室



で派遣された。臨機応変な雇用制度がなかった日本の大学では、計算機の性能を多少犠牲にしても人手がつかうほうがありがたかった。会計課も、国内経済を優先する立場から国内メーカーとの契約を支持した。

結局、予算要求は、集団遺伝の計算機を入れ替えるための予算増額という形でしか認められなかった。

87年1月、建設中の遺伝情報研究センター棟に計算機室が完成した。搬入されたのは富士通の大型計算機「FACOM M-380」。宮沢が望んだ米国製ではなかった。

（伊東真知子・国立遺伝学研究所特任研究員）